慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	タイにおける農民生活の実態 : 閉ざされたカトリック村・ノン・サワンでの体験をもとに
Sub Title	Farmers' life in Thailand and its conditions
Author	小松, 隆二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1984
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.77, No.2 (1984. 6) ,p.193(69)- 207(83)
JaLC DOI	10.14991/001.19840601-0069
Abstract	
Notes	青沼吉松教授退任記念特集号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19840601-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

タイにおける農民生活の実態

——閉ざされたカトリック村・ノン・サワンでの体験をもとに——

小松隆二

はじめに——2度目のタイ農村生活——

「バンコクを語ることは，タイを語ることにほかならない」とは，あるタイ人スラム関係者がバンコクで私たちにもらした言葉であった。あまり気にもとめないで聞いていると，もっともらしくひびく言葉であるが，よく考えると，必ずしもストレートにはうなずけない見方でもある。

たしかにある面では，この見方は真実をついている。タイのような発展途上国では，そのかかえる諸矛盾が都市に集中して表現されるので，社会問題やそれに対する運動という視点からすれば，まさに的を得た説明といえるだろう。

しかし反面で，この言葉には十分に説明しつくされない部分もふくまれている。たとえば，タイでも，人口的にも，また主食品や輸出産品の生産・産出の比率でも，まだ農村が重要な部分を占めている。人口は，1980年現在で約4,690万人，そのうち労働人口はほぼ50%にあたる2,348万人，さらにそのうち70%強が農業人口である。また輸出産品では，伝統的な米やゴムに加えて，タピオカ製品，砂糖，メイズ，チーク材など工業製品よりも，農林漁業に基礎をおく製品が主力を占めている。それに，バンコクのような大都市における社会問題の源そのものも実は農村にあるといってさしつかえない点にも注意をむける必要がある。これらの点からみると，むしろ農村を語らずしては，タイを語ったことにはならない一面も忘れてはならないのである。

発展途上国のつねで，タイでも中央と地方，都市と農村の相違や差別はあらゆる面で大きい。すでにその段階を通過してしまったわが国の現状からは想像もつかない大きな格差が厳然と存在している。たしかに農村への商品経済の浸透やテレビ・交通網の拡大は，農村に都会的な生活を少しずつ浸透させつつある。とはいえ，まだまともには，都市と農村は比較できないほど，各々別個の世界を形づくっている。都市で生起する多くの問題は，直接的にはまだ農村には無縁である。商品経済の真只中にあって現金収入なしには生活不能の都市と，さしたる現金収入なしでも生活可能な自給自足経済中心の農村では，生活水準さえ容易には比較できないのである。

昨年（1983年）もそのタイの農村に8月の3週間を使って訪問・滞在する機会を得た。一昨年の訪問と同様にアジア交流協会（Rural Asia Solidarity Association, 略称 RASA）によるタイ農村ワークショップの一員としての参加であった。

一昨年滞在したのは，北部パヤオ県の2村で，トゥンクロイ村とノンサンブン村であった。前者はタイ人，後者はラオス人の村で，どちらも貧しい村であった。ことに後者は少数民族の村なので，政府援助や社会開発活動の助成対象としても不利で，その貧困ぶりは山岳民族を除いたタイ全体の中では，もっとも悪いのではないかと思えるほどの内容であった。とりわけ一昨年はひどい旱魃で，一層底辺の位置にある農村の疲弊ぶりは痛々しく伝わってくる状態であった。

昨年私に割りふられた地域は，東北部のウボン，スイサケ両県にまたがる農村であった。その中で腰をすえて村と村民の生活をじっくりみることができたのは，ノン・サワン（Non Sawang）村であった。

1. 仏教国の中のカトリック村

タイが仏教国であることは，改めてことわるまでもないだろう。国民の94%が仏教徒である。しかも仏教が市民の生活の隅々に深く入りこみ，僧侶や寺院を敬虔にうやまう，きわめて信仰心の篤い仏教国である。町々や村々を訪ねまわっても，必ずつきまとうのが，仏教的な香りや仕ぐさがしみこんだ生活や風俗である。

その仏教国の一隅にカトリック村がある。しかも1つや2つではなく，いくつもある。タイにおけるカトリックを含むキリスト教徒の低い比率やわが国の体験からは考え及ばないことであり，その事実を知ったときはやはり驚きを禁じえなかった。

タイではカトリックは布教活動のために，全国を10の管区にわけているが，その1つに東北部のウボン（Ubon）管区がある。ウボン市がその中心であるが，ウボン県を含む5つの県からなっている。このウボン管区だけで大小あわせると30，比較的大きな村だけでも15ものカトリック村がある。ここでいうカトリック村とは，あくまで全村民がカトリック信者である場合で，仏教徒とカトリック教徒の混合村は含まれていない。きわめて興味深い宗教分布，とくにカトリックの浸透ぶりというほかないだろう。

昨年8月のＲＡＳＡワークショップで私に割りふられたのがこのカトリック村であった。その際私が訪ねることのできたのは，ノンタム（Nongtham），スイタン（Sithan），ノン・サワン（Non Sawang）の3村であった。そのうち，たんに外からの視察程度ではなく，短期間であれ，村に住みついて村民の生活をくまなく観察することができたのは，3つの中では一番歴史が新しく，規模も小さいノン・サワン村であった。

ノン・サワン村は，タイのどの村にも共通するように熱帯性植物に囲まれた緑豊かな村である。どこを見まわしても，ココナッツ，マンゴー，ノイナ，バナナなどの果樹が生いしげり，また鮮かな花々を咲かせる多彩な植物が黄や赤や緑に咲き競っている。その中にタイ式高床住宅が相当の間隔をおいてポツリポツリと立っている。それが村民の住居である。一見したところ，一軒一軒の土地は，狭い農家でも300坪以上はあろうかと思えるほどで，余裕のあるひろがりにみえる。しかしその住宅はきわめて簡素で貧弱なものである。近隣のどの村と比べても貧寒としている。いずれも不ぞろいの木材，それも汚れやしみやきずを丸出しにした木材を寄せ集めて建てた簡易住宅どころか，日本のバンガロー以下の住宅である。

村全体の67家族の住宅のうち，ペンキを施した住宅は一軒，それも部分的に施したにすぎない状態である。もっとも，タイでは工業製品であるペンキは，村民の生活水準からみたらべらぼうに高い。普通の農家一戸にペンキをぬると，２～３万バーツ（約20～30万円）もかかるので，とても手がでない。だから，この村に限らず，もし村にペンキを施した住宅があるとしたら，それはごく少数の裕福な地主・高利貸・商人の家とみてよいのである。

ともかくタイは，都市と農村では生活内容や水準の差が極端にあらわれる国である。外見からみるだけでも，バンコクのような大都市とはもちろん，近くの県庁の所在地であるウボン市に比べても，ノン・サワン村は到底同じ国とは思えない外観を呈しているのである。

2.　閉ざされた社会

タイの農村は，各々が独立的・閉鎖的な性格を強くもっている。長い間，村外との交流といえば，この地方では３月に村から村へ巡ぐりくりひろげられる地方祭の季節に，近隣の村々との間に交流・往来がみられる程度であった。少数民族同士の結びつきや信仰などの特別の同一性がない限り，よそものが村に入りこみ，定住することは決して容易なことではない。

それでも，ラジオやテレビ，自転車やオートバイ，あるいは自動車やバスなどの流入は，否応なく農村に都会生活を紹介したり，多様で魅力的な工業製品をみせつけたり，また村外との交流・往来の機会を増やしたりもした。その結果，どの村々も急速に商品経済にまきこまれることになった。奢侈的な商品，夢でしかみられなかった魅力的な商品がどんどん眼前に迫ってくれば，それを自分のものにしたいと願うのは当然の人間の性であろう。そこまでいかなくても，日用品的工業製品は一度手にすると，そう簡単にその使用を中止するわけにはいかなくなる。しかも，それらは自家製でまにあわすというわけにもいかない。どうしても市場を通してお金で買うしかないのである。

農民たちも，自給自足生活を抜けだすべく，余ったものを近くの商品経済のすすんだ町の市場に出かけて売りはじめた。そこで得たお金で必要なものを買うのである。その結果，石けん，シャン

プー，歯みがき，たばこ，砂糖などは農村でも日用品になってしまった。これらを買うには，現金収入を得なくてはならないので，ほとんどの農村がまだ全面的にではないが，商品経済に日常的にまきこまれる状況になっている。

さらに若者・青年は，余裕がでてくると，日用品のみでなく，ラジオ，それから自転車，オートバイと買い上っていく。ノン・サワン村でいえば，ラジオは近くの町で新品でも安いものなら，300バーツ（約3,000円）前後で入手できるので，ほぼ全戸に行きわたったとみてよい。あぜ道にラジオをおいて耳を傾けつつ田植えや畑仕事をしている姿は，農村では到るところでみかける光景である。自転車もかなり行きわたっている。もっとも，ほとんどが旧式の古い自転車である。それに比べてオートバイはまだ少数の農家しかもっていない。自動車にいたっては，カトリックの神父のものを除くと，わずか1台あるのみである。それが後述するように，村民の他町村，とくに市場の開かれるカンタラロン（Kanthararom）に出かける交通機関の役割を果たしている。テレビは，電力そのものがまだ村に入っていないため，2台あるきりである。そのうち，1台はカトリック教会内に，もう1台は村民の家にある。後者の1台も，もとは教会にあったもので，神父が新しいものを教会に入れたときに，古い方を村民に与えたものである。いずれもバッテリーを充電して観る方式である。

ただ村民のもつたった1台のテレビの影響力はすさまじい。都市生活の様子や流行の先端を行く商品は，手の届かぬ遠い存在で，せいぜい噂か伝聞でしか伝わってこなかったのに，テレビのおかげで，それらが眼前に，しかも美しい装いをほどこして迫ってくる。とりわけ日本の自動車や電機製品の宣伝がかしましく，市民の生活態度に変化を与えているのは，アジア諸国に共通した特徴である。

このように，タイの農村，それもノン・サワンのような小村まで急速に変貌しつつある。しかし多くの村は基本的には今でも自給自足，自己の生存をはかるのが主たる目的の生活にとどまっている。家族に必要なものをまず確保し，余った分のみ販売にまわす。そしてその範囲で商品経済の流れの中に入りこむのである。自己中心の生活意識，外部の動きへの無関心，長い間，政府をはじめ村外のものに期待も依存もすることなく，ただ黙々と自力で農耕に励む以外はなかった毎日，その結果として閉鎖的な社会の成立。そのあり方は，近年少しずつ変わりつつあるとはいえ，なお容易には変わりえないほど，根深く沈澱・定着しているのである。

たとえば，私の滞在中の8月12日は母の日，つまり王妃の誕生日であった。この日は祝日で仕事は休みであるが，この地域の農民は一般の慣行に関係なく，休みをとらず農作業にうちこんでいた。また一般の村と同様に，この村にもいまだに直接の郵便集配サービスが行われていない。このことにも，閉鎖性を色濃く残している社会状況がよくうかがえる。その必要がないほど外部との交流がないということであるが，郵便は，村長が政府支庁のある地区（アンプー。ノン・サワン村にとってはノン・クーン〔Non Khun〕村）に会議等のために出かけた折に，支庁に設置されたノン・サワン専用

のボックスをチェックして，もし村民宛の手紙があれば，持帰るという方法によるだけで十分なのである。

ただ閉鎖的といっても，有難いのは，われわれ外国人に対してはどの村民も一様に暖かみのある笑顔と礼儀正しさで接してくれることである。こちらから接近していっても，およそ排除や閉鎖性を感じさせる対応を示すことはない。村外からやってきた同国人，ことに異民族のタイ人に対しては未だに閉鎖的・排他的な態度をとるのに，われわれには終始にこやかに接してくれるのには，もちろん理由がある。われわれの滞在が定住を目的とするものではないことがはっきりわかっているからである。それでも，例外がないほど，われわれに示す好意や笑顔，ことに子供たちの素直な気持や礼儀正しさは，たった一人の非村民として村で生活した私に，安堵感と，タイの古い殻を突き破る将来への期待を何となく抱かせてくれたほどであった。

3. カトリック村（ノン・サワン）の成立と実態

ここでノン・サワン村について，その成り立ちなどもう少し基本的なところから見直してみよう。

ノン・サワンの地にカトリック教徒が入ってきて，村の開拓をはじめたのは，約50年前のことである。そう古いことではない。

この東北部では，フランスからの布教活動が盛んであったが，当時先にカトリック村を形成していたスイタン村からの農民の移住・分村という形が村の始まりであった。スイタンからノン・サワンまでの距離はおよそ40キロメートル。同村のカトリック教会から，あるいはその近くで，同じくカトリック村として開拓がすすめられていたノンタムの教会から，神父が交代でやってきては滞在し，布教活動に従事したのであった。そのため，教会も，20年前に建てられた現在の教会の位置からすぐ近くにあるシスターたちの宿舎あたりに，早い時期に建てられた。そこが自然と村の中心にもなった。

このように当初はスイタン，のちにはノンタムのカトリック村でうまくいかなかったり，そこでの生活に見切りをつけたりしたものが新天地を求めて，この地にやってきたのが，ノン・サワン村開村の事情であった。その後，つい最近までひき続き，各地からカトリック教徒が少しずつ集まってきて現在のような規模になるのである。

従ってカトリック村としての形成過程も，スイタンやノンタムとは大部ちがっている。スイタンやノンタムでは，その形成期には最初からカトリック教徒であったものもいるが，出身地に何らかの事情で住めなくなり，追われるようにその地にやってきたものなど，多様な経過をたどって村民が集まってきた。だから最初からすべての移住者がカトリックだったわけではない。洗礼も入村後というものが少なくなかった。

それに対して，ノン・サワン村には，すでにノンタムで洗礼をうけたものが移住し，村民を構成したので，あとから来るものも自然に各地のカトリック教徒がほとんどとなった。ノンタムのように，カトリックの村づくりをめざす特別の宗教上の苦労もなしに，ある意味では自然にカトリック村が出来上ったのである。

ノン・サワンの地名は，「明るい高地」なり「明るく他処より高い所」を意味する。ノンは「周囲よりやや高い所」という意味なので，タイではいたるところでみられるノンの文字をもつ村は，通常地形的に他よりやや高い所にあると考えてよい。ただタイの場合，周囲より高い所が必ずしも良好な土地や肥沃な土地を意味するのではない。むしろ川や灌漑用水などから遠く，水の取り方がむずかしいので，耕作や生活の点では，農民からは敬遠されるのが普通である。同一の村の中でも，高い所に住居や田畑を構えているのは，貧しい農家や遅れてあとから入村した農家である。日本でいう山の手といった地理的理解は，タイの農村では通用しないのである。

その例にもれず，ノン・サワン村も，周囲の村々より土地がやや高い分，農耕には不利である。水に恵まれず，土地も豊かではない。タイでは，もともと東北地方は地味に恵まれていないが，その中でもノン・サワン辺りが一番土地条件が悪いといわれるほどである。

そんな土地柄だけに，結局住みついたのは，タイ人のみで400人余。現在は（1983年8月），405名，67世帯からなる村である。[(1)] 1世帯平均6人と，日本に比べたら世帯人員は多いが，タイでは必ずしも多いとはいえない。行政的にはスイサケ（Sisake）県ノン・クーン（Non Khun）地区（アンプー）ボク（Bok）郡（タンブーン）に属している。ボク郡は12か村からなるが，カトリック村はノン・サワン村のみである。

職業に目をむけると，67世帯全戸が農業に従事している。若干を除いてほとんどが専業農家である。3世帯のみ精米所を兼営しているが，そのうち比較的大規模にやっているのは1軒のみである。それに東北地方にも広範にみられる大地主や高利貸もこの地には住んでいない。かなりの土地持ちはいるが，[(2)] 小作人を大々的に使用し，搾取を行うといった地主ではない。1世帯当りの土地の広さ

注（1） タイの国家統計は，問題によってはまだ十分に客観性をもつ整備されたものとはいえない。人口や世帯統計も例外ではない。とくにバンコクなどのスラム人口の把握のむずかしさから，問題は容易には解決されない。ただ単位組織である村にかんしては，人口や世帯構成などは正確に集計されている。村には村役場に相当する建物・事務所はない。そのかわりになるのが村長の自宅である。村長宅には，日本でいう住民票にあたるものが保存され，村民の異動状況をきちんと把握している。

（2） この点をもう少し詳しくふれると，北部に比し，東北地方は自作農が多いといわれるように，たしかにノン・サワン村でも，地主・小作関係が特別深刻な様相を呈するようなことはない。北部の農村では，大地主や高利貸（華僑が多い）の高額の小作料や高利の借金に追いまくられている農家の実情を何度もみせつけられた。借金の場合月10%（以上）の高利がふつうで，旱魃のため収穫が少なく，家族で食すだけにも不足する米を買うお金，バンコクやアラブ諸国への出稼ぎのための旅費にあてるお金などが借金の主な理由であった。この貧しいノン・サワン村にはそれがみられなかった。たしかに村の中心，つまり教会のすぐ前に住む開村時から定着している農家のように180ライ（75エーカー）といった広大な土地を持っているものもいるが，農耕に不向きな原野が多かったりで，小作人に貸与して小作料を稼ぐというわけにはいかないのが実状である。

は平均15～20ライ（24,500～32,000m²）位で，他地区の平均よりはやや少ない。土地を全く持たぬ世帯も若干はある。そのわずかの農家は土地を借りて生計をたてる小作人となっている。

その他は公務員も教員も警官も1人も居住していない。小学校の校長も教員5名もすべて他村からの通いである。

もっとも，現在徴兵で2名が軍人になって村外にでている。他に常時，女性は4～5名，男性は2～3名が，バンコクなどの都会に出稼ぎに出ている。そのうち，女性の出稼ぎは，売春にも結びつきやすい都会のサービス産業への就業がほとんどである。村外に出ていくのは，そういった出稼ぎ者か，他村に嫁ぐ女性だけで，けっしてより高い教育をうけるためとか，よりよい地位や仕事を得てということではない。すべての男性は20歳で兵役検査をうけるが，その結果徴兵にあい，村外に出る場合も，その間最低であれ，当人の生活は軍で保証されるにもかかわらず，村の自分の家での労働力が確実に1人減るので，必ずしも歓迎されるものではない。ちなみに，この村には他村にみられるようなシンガポールやアラブ諸国に出稼ぎにでるものはいなかった。

農民の所得についてみると，正確な統計があるわけではないが，農家の平均は，全国の農民の平均所得とされている6,000バーツ（6万円）よりやや低目程度と推定されている。1万～2万バーツの所得を得るものもいるが，それは少数である。反対に1,000バーツをはるかに下まわる農家も少なくない。商品経済にまきこまれた農村では，通常6,000バーツでは生活ができないといわれるが，この村では，まだ自給自足の度合いが強いため，6,000バーツ以下の所得でも生活は可能なのである。

このような状況をみると，ノン・サワンの閉鎖性は他村に比べても異常なほどあらわな特徴となって現われていることがうかがえる。ノン・サワンよりももっと貧しい村，たとえばラオス人など少数民族の村にまわった時でも，1人か2人は，現に近くの市や町の高校に通っているか，親の悲願が実って教員養成大学を出て教員になっているものがいるかしたものであるが，ノン・サワンにはそういった例が最近はみられない。

なお村内には日用品を扱う小さな雑貨店が2軒ある。石けん，シャンプー，歯ぶらし，歯みがき粉，紙などが販売されている。政府支庁の援助をうけて運営されているが，店は店舗提供農家の兼営という形をとっている。もっとも形式的には，政府援助を生かすため，村長の下に購買委員会が組織され，同委員会が運営にあたっている。ただ2店とも品数も少なく，大きな買いものや日用品以外の買いものはすべてカンタラロンあたりに出なくては入手できない。

年齢構成についてみれば，日本の農村とちがって，若者が多く，60歳以上の高齢者は数えるほどしかいない。村長も37歳でまだ若い。全人口の2割強にあたる85名が小学生である。この点にも，先進工業国，とくに日本にみられるような過疎の問題とは無縁で，むしろ若者が村を離れる条件がきわめて少ない停滞社会，ないしは閉鎖社会の性格が強くうかがえる。

以上の職業構成や村民の出入り状況等をみても，ノン・サワンにおける生活水準の低さや閉鎖的

な村のあり方がよくうかがえるだろう。

4. 村民の生活と余暇

（1）一日の生活

ノン・サワン村では，全戸が農家ということもあって，村民の生活は実に規則的である。田植えに追われる7，8月でみると，月曜から土曜まで，男性たちは朝5時頃から田畑に出かける。この時節は日の出が早いといっても，5時というと，まだ暗い。8月は農繁期のため，この地では小学校も休みである。その間は，小学校の上級クラスの子供も，父や兄を追うように牛か水牛を引きつれて田畑に出かける。小学校の低学年の子供も，6時から7時頃までに山菜つみに出かけたり，各種の手伝いをしたりする。その後，男性たちを追うように，食事の仕度をととのえた女性たちが食事を荷車につんだり，子供をつれたりして田畑に出かける。

朝食は一仕事終った9時から10時頃，昼食は2時頃になる。朝食も昼食も，さらに夕食も，日本人の目でみたら貧弱な内容である。米（もち米が中心）のみで，それにもち米のたれにするタイ風の辛いスープだけということも珍しくない。魚や山菜はときどき食卓に並んでも，肉はまずめったに出ない。田畑で食べる弁当には干魚が少しばかりおかずになることがしばしばみられる。子供たちの食生活も同様で，内容や栄養等では子供の養育に必要なものもとっていないのが実情である。

昼食のあと，仕事の段取りや進み具合によっては早い家で4時頃，各々の家に引きあげるが，その頃休憩をとって暗くなるまでさらにもう一仕事する農家もある。

農作業はきびしい。こういった貧しい村でも，最近化学肥料を使うようになったが，近代的な農機具までは手が出せない。せいぜい水牛に引かせる簡単な農機具どまりで，あとは人手がたよりの旧式の農業形態である。その上，熱帯ないしはそれに近い風土で，暑さもきびしい。それを避けるため，女性は手足や顔まで布でおおって農作業をする。若い男性は上半身裸で作業するものが多いので，もともとはそれほど黒くはないタイ人も，青年になる頃には外に出ている皮膚の部分は真黒になる。

最終的に，暗くなる6時半から7時には，どの農家も家に戻って，夕食をとる。夕食を終えると，もう家の内も外もとっぷり夜の闇に包まれている。次の日の労働にそなえる疲労回復や灯油の節約のためにも，夜はレジャーや交際もなく就寝する。とりわけ農繁期には，日曜日以外レジャーや村民同士の付き合いもみられないのがふつうである。

もちろん，夕食後，家族同士や近隣同士で短時間の団らんや話し合いがもたれることもある。若者はラジオに耳を傾けたりもする。ただその場合も，それほど長い時間ではないし，灯もつけないでそうしている場合が多い。この点では，ノン・サワンは，私がこれまでみたタイのいくつかの農

村に比べても，つつましい生活スタイルを守っているといってよいものであった。

（2）村民の余暇

ノン・サワン村がカトリック村であるだけに，農繁期でも，日曜日だけはここの農民たちは原則として田畑には出ない。自宅で1日を過すことになる。

日曜日には，朝5時30～45分の間に最初の鐘の音が教会から村中に鳴りひびく。村民の起床である。平日より1時間以上遅い目覚めである。6時半になると，2度目の鐘が鳴りひびく。この頃にはかなりの子供たちが教会やそのまわりに集まりはじめる。教会をのぞくと，もうお祈りをはじめている女性もいる。6時55分に3度目の鐘が鳴りひびき，7時から礼拝がはじまる。

村民たちはこの日曜ミサに出て，約40～60分のお祈りをすませると，家に戻る。朝食はそれからであるが，それでもいつもより早く8時半頃になる。あとは，農具の手入れ，魚つり（レジャーそのものというより，食糧用として），近隣との付き合い，ラジオ，テレビを見たり聴いたりといった，ふだんできないことをする。カンタラロンなど市場のたつ近隣の町に出かけて，農作物を売ったり，必需品を買入れたりするのも，この日曜日である。また若者がオートバイや自転車を乗りまわすのも，よく夕方から早い夜にかけて庭や路上に数名の若者が集まっては，すわりこんで酒を飲みかわしつつ談笑するのも日曜日に多くみられる光景である。

村民のレジャーについてもう少しみてみると，その中味はきわめて限定されている。

毎週末規則的に行われるレジャーは，土曜と日曜にテレビで放映されるタイ・ボクシングを観ることである。もちろん村全体ではなく，一部の男性が熱中しているものである。その際，通常はお金が賭けられる。もう少し大きな町や村に行くと，われわれよそ者がみている眼前でも，10バーツ（100円）や20バーツの札をふりかざして賭けあっている情景が何度も展開されたことがある。しかしこの村程度の小さな村になると，賭けのスケールも小さい。ある日曜の午後，神父が提供したノン・サワン村唯一のテレビのある村民の家で，私も村民と一緒にテレビでタイ・ボクシングを観たが，そのときも，その程度のものであった。そこに集まった村民は子供をいれて25名位。そのうちお金を賭けていたのは青年男性の5，6名で，金額も硬貨で数バーツずつといった少額の金のやりとりであった。

またタイの農村では，非合法というほど大それたものではないが，ほとんどの村で，密造酒屋とともに，カジノと称される小さな賭場があるとみてよい。彼ら自身カジノなどとよぶが，すべてハイ・ローとよばれる単純な賭け事である。私も，パヤオ県の村ではのぞくだけのぞいたことがある。ノン・サワンでは，ハイ・ローのカジノは常設はされていない。しかし時々若者中心に，日本でマージャンを気軽にやるように，ごく気軽に野外で開かれる。タイ・ボクシングと同じで，賭け金はきわめて少額である。

賭け事とは少々ちがうが，貧しい村民にも，宝くじを買うことが楽しみの1つとなっている。かなりの村民が1枚10バーツの宝くじを少しずつ買っている。新聞を購読する習慣のない村民たちは，抽選日がくると，神父のところに新聞を見にやってきては，当選番号をチェックする。

ほかに，年に2，3回巡回映画がまわってくる。路上や広場で囲いをつくり，1人4～5バーツ（40～40円）の料金で観せるものである。これも人気がある。

またキリスト教的な祭り事といえば，クリスマスやイースターであるが，この村ではそれほど派手には祝われない。クリスマスの時に教会が子供たちにビスケット程度を配るほかは，ミサが行われるだけである。それらよりも，また4月のソンクラン祭（タイの正月）よりも，3月の地方祭の方がこの地方の村民には大きな行事として待ちのぞまれる。この地方の村ごとに，1日ずつずらして祭がくりひろげられるのだが，この時は近隣の村にも出かけたり，他村からもやってきたりして，数日の間，祭りを楽しむ。祭といっても，ノン・サワンの例でいえば，朝教会でお祝いのミサをあげたのち，あとはこの日のためにやってくる映画や露店に出かけたり，他村の年の合う相手と付き合ったりする。民俗・民族的なダンスなどは行われない。こんな祭での交際から，異なる村の男女が知りあい，結婚することも時々みられるという。

レジャーといえば，家族単位のそれも気にかかるが，ノン・サワン村では日本でみられるような一家そろって近くの都会やハイキングに出かけたりする慣習はない。あるとすれば，母子あるいは父子で，山菜採りや魚つりにでかける，いわば食糧確保がねらいの親子連れの行動がみられる程度であろう。女性は通常レジャーらしいレジャーをもたない。テレビや映画に出かける女性はいるにはいるが，その姿はまばらにしかみられない。タイ・ダンスを習ったり，家で織物をしたりする位であろう。子供たちは子供たちで，親の手も，高価な器具・道具の力も借りることなく，自分たちで作ったボールやゲーム台で遊んだり，日本の石けりや綱引きに似た路上の遊びをしたり，いずれも素朴な遊びに興じる。

このようにレジャーも伝統的な枠の中におさまりながら，しかし外部から資本主義的な攻勢を少しずつうけて，貧しい村民のレジャーも変容をみせつつある段階である。基本的にはまだ貧しい生活を反映して，お金のかからぬレジャー・素朴なレジャーが中心である。

（3）村民とカトリック

全村民カトリック信者のこの村の場合，一体どの程度村民はカトリックなりキリスト教の教義を理解し，自分のものにしてうけとめているのであろうか。この点は，私がノン・サワン滞在中，つねに考えさせられた疑問であった。

開拓が始まってから50年にもなるので，もう大体2代目，今の子供たちは3代目にもなる。そのため幼児洗礼をうけるものも多くなりつつあり，カトリック信者であることをそれほど意識しない

ものも増えている。家庭に聖書をもっているものはほとんどいない。聖書は教会にしかないと考えてよい。中高年齢者にはタイ語を読めないものが多いし，学校教育が整備された最近にいたっても小学校を卒え，タイ語を勉強したはずの若者でも，全員が全員タイ語を読みこなせる状態ではないので，活字には容易には目がいかない現状である。だから聖書が家庭にないこと自体は殊更驚くにあたらない。同時にそれは，信者の多くがなおも耳や体で得たカトリックの知識の段階を出ていないことをも示している。

しかし以上のことは，反面でカトリックを，理屈としてではなく，自然に抵抗なくうけいれているものも依然として少なくないということでもある。たしかに開拓期には，カトリック教会が存在するだけで，少数の開拓民にとっては大きな支えであったことは想像できるが，現在でも，毎日曜日には大きな礼拝堂が一杯になるほど（私の滞在した2度の日曜日とも200名をこえる村民の出席があった），村民が集まる。また週1回学童を対象にした聖書の勉強会・ミサが行われる。これにもかなりの学童が集まる。この点でカトリックが村民の生活の中で精神的には今も大きな位置を占めていることはいえるだろう。

それでは，現在，村民にとってカトリック教会がこの村にあること，あるいはカトリックの信者であることが，精神的意味以外に具体的なメリットになることもあるのであろうか。

長い間，教会が村民に直接物質的・経済的援助を行なうということはなかった。凶作などが極端な場合には，貧困家庭への食事サービスがなされたことはまれにはあったという。しかしそれとても恒常的なものではなかった。その種のもので恒常化される活動がこの村でなされるにいたったのは，丁度私たちが訪問した昨年からであった。その1つは小学校学童への昼の給食サービスであり，もう1つは3歳から学齢までの幼児への保育サービスである。

前者の給食サービスは昨年（1983年）5月17日から開始された。部分的な給食活動はかつてこの教会でも経験があったが，月曜から金曜までの毎日継続して行なうようになったのは初めてであった。毎日お昼に，教会のシスターや給食係の女性職員が礼拝堂の前に建てられた給食場で，小学校学童全員85名に対して2度にわけて無料で給食を提供するものである。

後者の保育サービスは，昨年3月から始まった。給食サービスと同様に，月曜から金曜までの朝8時から午後3時まで就学前（3歳以上）の42名について，シスターたちが礼拝堂やその周辺の広場で保育サービスをするものである。その間，食事や昼寝（礼拝堂で）の世話などもする。ただこのサービスは無料ではなく，協力ということで，1人当り月5バーツ（約50円）の寄付をうける。ただし現金でなくともよく，穀物，野菜，果物など何でおさめてもよい。金額からして，村民に負担になる額ではなく，教会もそれを運営のあてにするほどのものではない。従って有料のせいではなく，むしろ親の都合ということで，毎日全員ではなく，大体30名位の幼児が集まる程度である。

以上の給食と保育のいずれも，その費用のほとんどはバンコクのカトリック系大学の学生の寄付

によって維持されている。東北部では，ソン・イエ（Son Ye）村などで，フランス系のＣＣＦ（Christian Children Fund）の援助でカトリック教会が給食サービスを行なっているが，それを参考に導入したものであった。

これらのサービス以外に，教会が村民の病気・怪我・老齢などに対しても具体的なサービスをしてきたわけでも，現在もしているわけでもない。もっとも医療にかんしては村には政府が村民の1人に委嘱する医療担当員はいるが，素人同然でほとんど頼りにならない。そこで重病人の発生などの時は，神父が車でカンタラロンの病院に運ぶ位のサービスはする。せいぜいそんな程度のサービスである。

このように教会が村民に具体的に有益なサービスを提供してきたわけでもないとすると，全村民カトリックという状態が維持されているのは，たとえ耳や体を通してであれ，村民がキリスト教の教義をよく理解し受容した結果なのであろうか。仏教国の中で，全村民カトリックといった村をつくりあげ，その後も維持できているのは，結局開村がカトリック信者によってなされたということ，そしてその後も精神的なよりどころになり続けえてきたことによるのだろうか。この点が未だに私にはよく納得できないで残っている疑問である。

（4）村の組織化活動

私が村民1人1人の中に占めるカトリックの意味や位置を十分に確かめ，納得しえなかったのは，組織化をはじめ，神父が声を大にして訴えてきたことが，ほとんど実現していないことにもよる。神父は，村民に今一番必要なことは，外部から経済的援助をうけることよりも，村民自体が組織化をはかること，そして責任意識をもつことである，とくり返し強調する。ところが，どちらもさっぱりすすんでいないのである。東北や北部地方で広くすすみつつあるライス・バンク（米貯蔵組合），バッファロー・バンク，生活扶助組合，購買委員会等にしても，この村ではわずかにライス・バンクと購買委員会があるのみである。同じカトリック村のノンタムは人口でもノン・サワンの4倍あるが，ライス・バンクの加入者も7倍近い70名を得て，活発に活動しているのに対し，この村のそれは11名が加入しただけの小規模のものにすぎない。創設時には貯蔵庫を作ったりするため，どうしても加入金が高くつくのが，参加者の少ない理由である。現村長さえ，経済的理由で加入していない状態である。購買委員会は日常的に機能しているといってよいが，規模も小さく，ここから新しい何かが生まれるといった性格のものではない。

社会開発や組織化の正否に関係する村民としての自覚や責任意識にかんしては，こういった組織活動がほとんど結実していないことにも，その欠如ぶりがうかがえるが，この村には案外泥棒件数が多いことにも，この点はうかがえる。もっとも，夜の闇を利用した牛や水牛泥はどの村にもみられ，犯人もめったに捕まらない。そのため，この村の事件がこの村のものによるのかどうかはわか

らない。それにしても，神父の留守の間に，神父の居室が荒され，テレビはじめ貴重品類を何度かとられているように，窃盗という点では治安のよくない村であることは確かなようである。

この点でも，カトリック信仰と治安の悪さの結びつきにどうにも納得できないものを感じざるをえない。しかし同時に神父や村長を中心に，後述するように教会を媒介にしてダムの建設など新しい活動にむけて委員会を結成しだしたことなど，社会開発活動が村の内部から生育しだしたことも注目してよい。まだその活動は成果にまでは結実していないが，活動自体はその後も継続中で，資金援助を日本に要請しだしたり，いよいよ本格化の兆しもうかがえるところである。

（5）村の教育

この村には，教育機関は小学校しかない。1学年から6学年までで，これが義務教育年限でもある。現在85名が在学している。村で学齢に達しながら，学校に通っていない児童は2名で，2人とも軽度の知恵遅れである。私もこの2人には頻繁に接したが，決してむずかしい障害状態とは思えなかった。もし小学校側にもう少し熱意があれば，問題なく受けいれうるケースといってよいだろう。しかし学校にも家庭にも就学させることにとくに関心を示す様子はみられなかった。なお，公立学校なので，学費は無料である。

小学校を卒えると，全員が進学することもなく，村内で農業に従事する。この点からも，この村が近隣でももっとも教育水準が低いといわれていることがうなずけよう。他村では，寒村でも1人位は小学校以上の教育をうけるものが出るのだが，この村ではそういった事例は耳にしなかった。

最近は，校長以下，学校教育に大いに力を入れている。礼儀や伝統の尊重などの面では効果をあげているが，学力の方は容易に成果が上らないということであった。2，3年でタイ語をある程度読みこなすものもかなりでるが，6年の過程を終えても，タイ語をさっぱり読めないものも，必ずいる状態である。

教員は校長1名，教員5名（うち女性は1人）の計6名。各学年1人ずつのぎりぎりの教員数である。教員の待遇は，高卒で1,700バーツ（プラス若干の手当），大学卒で2,700バーツから始まる。現校長の例でいくと，18歳で教師になり，24歳で校長に昇格。以後13年間校長の地位にあり，現在の給料は月3,500バーツである。

ちなみに全教員が他村からの通いで，しかもカトリック信者は1人もいない。全員仏教徒である。

ほかに教育活動というと，村民が指導者となって子供のためにキリスト教（聖書）の学習会を開く程度であろう。

ともかく教育にかんしては，この村には義務教育という最低限の用意しかない。それをのりこえて先にすすむものも，まずいない。全く自己完結的に村内で単純再生産をくり返すのみである。この面でも，ノン・サワン村は閉ざされた村なのである。この村が貧しいこと，そしてなおもいろい

ろの意味で1つの村の枠を超ええないことも，教育の遅れと無関係には思えないのである。

おわりに——組織化の兆し——

ノン・サワン村の実情をみる限り，タイの村民生活，ひいては市民生活の向上は至難のわざという実感を覚えざるをえない。宗教的に共通する土壌をもち，協同せざるをえない閉鎖社会にありながら，組織らしい組織もないのである。神父がいかに組織化と市民としての責任感の把持の必要を説いても，恒常的に機能している組織といえば，ライス・バンク1つである。それでさえも，11名加入しているにすぎない小規模のものである。あとは，村と教会の合同の社会開発委員会が時折活動するのみである。大部分の農民にとっては，自分の家族の生活を守ることが最大の目標で，現実にそれで精一杯なのである。その枠をうち破ることはむずかしい。

といっても，そこには悲痛さややり切れなさ，あるいはあきらめは感じられない。単調な生活の中にも，それに納得している生き方の方が感じられる。今年が日照りでだめなら，来年があるさ，といった変な余裕もある。決して単なるあきらめではなく，先のことをくよくよ気にせず，何とかなるさといった，まさに<マイペンライ>で表現される生活態度である。

当然バンコクでいかなる政治や政争や社会的活動が展開されていようと，遠く離れた村民には無関係である。国王や王妃の誕生日さえ無関係である。村民が中央の動きで関心を示すことといえば，土，日のテレビで中継されるタイ・ボクシングの試合だけといってもいいすぎではないほどである。

しかも，村のリーダーたち，つまり神父，村長，それにその協力者たちの対応をみていても，日本人からみたらもちろん，一昨年滞在したパヤオ県の2か村のリーダーたち，あるいはチェンマイやバンコクの社会開発活動のリーダーたちに比べても，極端にスローテンポの対応である。タイの農村に出かけたら，日本での生活テンポを何倍にもうすめないと，リズムがあわなくなるといわれたものだが，2週間行動を共にした神父たちの活動ぶりや行動は，私どもにとっては何とものんびり間のびしたものであった。神父はくり返し，のんびりいくしかないと明言していたし，生活態度もその通りのものであった。

この態度はある意味では正しい。タイの農民を一番よく知っているのは彼らであり，また少し急ぎすぎたり，過激になれば，法律，警察等の力で圧迫が加わることも，彼らがもっともよく知っているからである。

それでも，この村にも，わずかながら明るい光がみられないわけではない。子供たちへの教育の浸透がその1つであり，新しいタイプの村長の誕生もその1つである。とはいえ，その教育をうける子供たちが成長して村のリーダーになるのはまだまだ先にまたねばならない。それでも，現在の青年たちにかんしても，村長選挙のことを想起すると，わずかであれ明るい見通しも抱けないわけ

ではない。

今から4年前，前村長が村道工事でアンプー（地区）の上層部と結託して汚職をしたことから，辞職をしいられる事件が発生した。それを機に，村では生活レベルも低い部類に属する若い30代の現村長が当選した。クリーンで，教会での活動をみても指導力があるということが，支持をあつめた理由であった。お金が動くそれまでの選挙とは全くちがった選び方をされた村長だけに，村にも少しずつ新しい動きがみられだす引き金になったといえる。ここ1，2年でアンプー政府支庁が村民の生活用にくみ上げ式の井戸を2か所に建設してくれた。また神父や村長ら村のリーダーの間に，スイサケ県とウボン県の境界にあって，ノン・サワンと隣接するプウェ（Puay）村の境を流れる川（Khruan River）にダムを作る計画が具体化されつつある。それによって洪水を防ぎ，かつ灌漑用水を確保し，周囲9か村農民の生活の安定をはかろうとする計画である。このクルアン計画を主導的にすすめているのがノン・サワンの神父や村長をはじめとするリーダーたちである。アンプー政府支庁はダム計画そのものは認める意向を示しているが，1つは政府が認め，見積るダムの規模，従って計画予算が大きく，資金調達上の理由から，もう1つは9か村の合意・協力を得るのに時間がかかることから，まだ実行にまでは着手できないでいる。現在はＲＡＳＡのワークショップとの交流を通じて，神父たちは日本からの民間レベルでの援助を期待しているところである。

きわめてむずかしい計画だが，これが成功すれば，各々閉ざされた社会を形成している村々の人たちに与える影響は小さくない。村民が下から要求や意見を出しあい，資金の見積りや隣村との話し合いまで，自分たちの手ですすめなくてはならない組織的で大がかりの計画だからである。その結果は個人あるいは家族中心の生き方，そして容易には村の外に目のむかない生き方に固執する農民に，否応なく組織や一村をこえる協力の意味を教えることになるであろう。そこに，閉ざされた社会状況を打ち破る糸口をみいだす可能性もひそんでいる。と同時に，それは商品経済とのかかわりを深めさせ，静かな自給自足経済の村に資本主義の悪しき側面をますます侵入させることにもつながりかねないことも覚悟しなくてはならないだろう。

（経済学部教授）